

先週から「テサロニケの信徒への手紙」の連続講解説教を始めました。1～4節までをお話する予定でしたが、緒論に時間を取られて2、3節の釈義を断念してしまいましたので、ここで少し補いたいと思います。

パウロは3節で「あなたがたが信仰によって働き、愛のために苦労し、…キリストに対する、希望を持って忍耐している」と言います。パウロは自分の手紙の中で、この「信仰・希望・愛」というセットの言葉を頻繁に使っています。「信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう」（テサロニケー5：8）。「あなたがたが…イエスにおいて持っている信仰と、聖なる者たちに対して抱いている愛…、天に蓄えられている希望」（コロサイ1：4,5）。

「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」（コリントー13：13）。

パウロの神学を考える上で重要なこのキーワードが、最初の手紙であるテサロニケ書の冒頭でもう登場しています。しかしここでは「信仰・希望・愛」と抽象的に羅列するのではなく「信仰の働き、愛の労苦、希望を持つての忍耐」と動的に表現します。

信仰：パウロの考えではキリストを信じるという信仰は、ある信念、思想というような静的な状態を表わす言葉ではありません。信仰を持っているなら、必ず行動を伴うはずだと言っているのです。それはキリストに促されて、何らかの行動となって現れるのです。イエスは「あなたがたは地の塩、世の光となれ」と言われました。それは放っておけば腐って行くこの世を腐敗から防ぐ行動をせよということであり、闇の中に沈んでいるこの世の中で光として輝けと言っておられるのです。

愛：愛という果物のようなものが客観的に存在し、それを食べれば愛が得られるというわけではありません。だからパウロは「愛の働き」とは言いません。愛の実践には苦労が付きまとうのです。楽をして愛が得られるわけではありません。愛とは私たちが隣人のために苦労する、その働きを愛と呼ぶのです。「神を愛し隣人を愛する」とは神のために（教会のために）苦労しなさい、隣人のために苦労しなさい、ということです。

希望：希望と忍耐とは、一枚の紙の裏表の関係にあります。しかし忍耐とは、ただ歯を食いしばって苦しみが終わるまで辛抱するという消極的なことではありません。勝利を確信する望みがあるから忍耐できるのです。これらすべてはキリストが我々に与えてくださる信仰の恵みと祝福であり、カルヴァンはこの三つ「信仰の働き、愛の労苦、キリストに対する希望の忍耐」を、真のキリスト教の簡明な叙述であると言います。